多気城下絵図

多気は室町時代、伊勢国司北畠氏の本拠として知られていて、城下の様子を描いた絵図が数多く知られています。

ただ、これらは北畠氏が滅亡した後、江戸時代以降の作成又は写しであることが分かっています。

いずれの絵図も左から右に流れる八手俣川を中心に両岸の城下の様子と周囲の山々を描く構図となっており、川は直線的に表現され、多数の人物名・寺社名が書き込まれています。絵図は大きく3種類に分類でき、その中でこの絵図は城下を最も細長く描いたものです。

後の時代に描かれた城下絵図は、必ずしも正確な歴史資料とは言えませんが、北畠氏の城下の様子を垣間見ることのできる資料として貴重です。

「霧山城御本丸」(霧山城跡)

中央上部に描かれた霧山城は、堅牢な造りの石垣が累々と連なる、城郭として描かれています。高い石垣や白壁の天守を思わせる建物などあたかも近世城郭を連想させるその描写は実際の城の状況と大きく異なっています。これは、往時の北畠氏の強大な勢力を誇示し権威づける意味合いがあったと考えられます。

霧山城跡(北曲輪)

「御殿」(北畠氏館跡)

現在の北畠神社の場所に「御殿」があり石垣に囲もまれた中に堂が描かれています。その横にある園池は「北畠氏館跡庭園」として今も残る庭園で、国の名勝に指定され中世の庭園の姿を今に伝えています。

発掘された出入口

北畠氏館跡庭園

「華生院」(景賞院跡)

景賞院跡

城下には多くの寺社名が記され、現在にも続く寺院の他、伝承地としてその名が残る場所があります。「華生院」は室町時代の記録に「景賞(正)院」とあり、現在も平坦地などが残ります。

六田館跡

六田館跡付近

北畠氏館跡の対岸にある六田館跡(東御所)は、堀が巡る目立つ存在にも関わらず、不思議なことにどの絵図にも描かれていません。

町屋

付近で発掘された室町時代の屋敷地

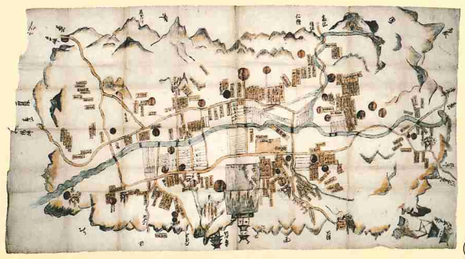
城下には偏在しながらも建物群が模式的に描かれています。北畠氏館の対岸には「魚屋町」「紙屋町」など近世の城下町を思わせる町名が見えます。

「比津番所」

周囲を山に囲まれた多気は峠道が主要な交通路となります。多気に至る峠などには「番所」として、櫓状の建物が8個所描かれています。

その他の種類の多気城下絵図

①は勢いのある筆致と細部の省略に特徴があり、2例が知られています。②は均整のとれた構図に特徴があり、細部に異なる部分もありますが、多くの類例が知られています。

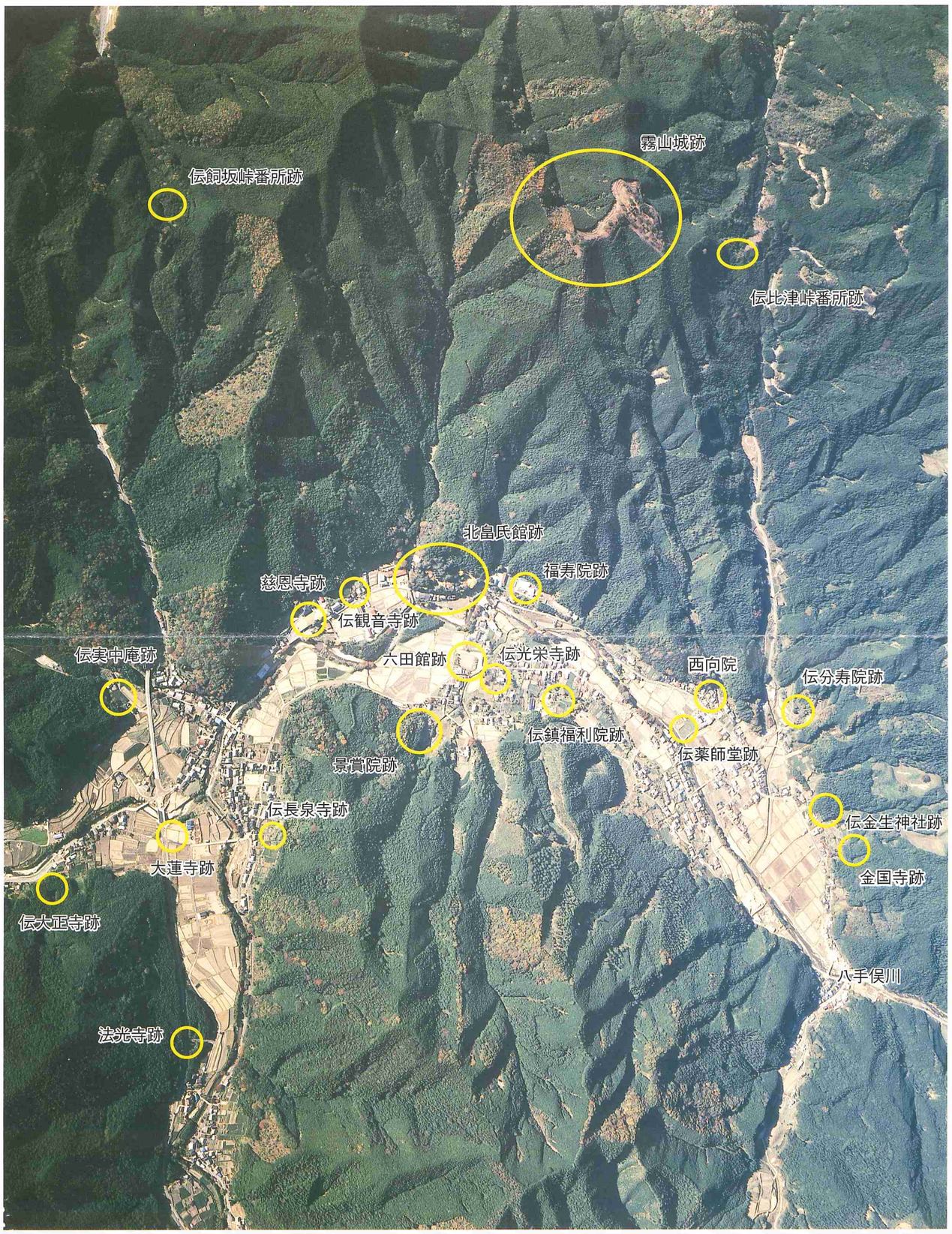


①

②

多気城下絵図の世界

城下絵図に見える主な寺社・城館跡



現在遺跡として確認できる
主な寺社・城館跡
（右が北）